

T. S. Eliot の詩における視点と実在

—— ‘eye’ symbol をめぐって ——

広 岡 実

T.S. Eliot ほど「眼」というものに異様な関心を持った詩人は少ないであろう。彼の詩にあらわれる ‘eye’ symbol は極めて personal な象徴であると共に、またある場合には conventional で traditional な象徴でもあるが、彼がそれを使用する時はいつも彼の個人的な必要にさしせまられて使ったのであって、その意味の発展の過程をたどることは彼の思想的発展の過程をたどることにもなり、極めて興味深いのである。

容易に推測できることであるが、「眼」はわれわれの「意識」に関連するものであって、まず第一義的には「知覚」を意味するであろうし、第二には「想像力」を意味するものであろう。Genesius Jones が指摘する如く、Eliot の ‘eye’ symbol の理解への鍵は、彼がドイツの現象学者 Edmund Husserl から引用した次の文章の中にひそんでいる。⁽¹⁾

The natural wakeful life of our Ego is a perceiving.

これはわれわれの外界を経験してこれに反応する覚醒した意識は知覚する「眼」で代表されるものであること、従って “eye” と “I” は置き換えることができるものであることを示している。しかしこれに関連して見落してならな

いことは、Sartre が注目した如く、Husserl の説の現象学的記述の方法である。つまり Sartre は Husserl を足場として知覚とイメージ（像）とは各々の志向によって異なる二つの志向的体験であるとして両者を弁別しようとしていることである。⁽²⁾ このことは Eliot の詩的方法たる Symbolism と彼の Reality への approach の方法に重要な関連がある問題と思えるのであるが、これは後述することにして論を進めることにしたい。

まず初期の詩においては、“eyes” は全体の人々を表現する一種の mythical な全体を代表する部分 (pars pro toto) として使われている。しかしながら、その描写には深い意味の発展がある。“The Love Song of J. Alfred Prufrock” における次の詩行にあらわれる “eyes” は19世紀の Personality の最後の無気味な痕跡を描写している。

And I have known the eyes already, known them all——

The eyes that fix you in a formulated phrase……

この世紀末的な眼はなるほど *Preludes* における如く「ある種の確信にみちた眼」(eyes/Assured of certain certainties) ではある。しかし彼等の秘めている恐怖と苦しみは *Rhapsody* における女性の眼やうつろな眼をした子供や、

I have seen eyes in the street

Trying to peer through lighted shutters,

にみられる眼や、また “La Figlia che Piange” における「一瞬眼に憤りのいろをみせて」(With a fugitive resentment in your eyes) 振りむくことを命ぜられる少女の眼の中にしばしあらわれるのである。自由主義的な19世紀文明の、言語、歴史、宗教、芸術のすべての次元が「公式的な文句」(a fomulated phrase) の中に固定されるのである。それらは “a gesture and a pose” の中

に萎縮してしまった過去の価値に対する疑いをあらわしている。しかしそれらはまた19世紀文明の **hero** としての無骨な個人主義者を尊重する価値、つまり **Personality** を重んずる価値に対する風刺でもある。更にこの傷について、いろいろとした **Personality** に関する描写は *Poems 1920* における商人 **Bleistein** の眼として表現されている。

A lustreless protrusive eye
Stares from the protozoic slime

また同じ詩集の中の “A Cooking Egg” を見よ。

The red-eyed scavengers are creeping
From Kentish Town and Golder's Green ;

そして “Whispers of Immortality” においては、荒れ狂う Dostoevsky 的 **Personality** を想起させるけばけばしい売春婦 **Grishkin** の “Russian eye” と対照されているのが17世紀形而上派詩人よりの影響が明らかにみられる次の表現である。

Daffodil bulbs instead of balls
Stared from the sockets of the eyes !

以上見て来た如く、これらの ‘eye’ symbol の意味するものはその形而上学的無知と盲目性である。最初の詩集 *Prufrock* において、Eliot が追求したのは全体的経験であった。彼は外界において知覚したタイプライターの音や料理の匂い等のような異種の印象を融合しようと努力しているとおもえる。そしてたしかに **mood** の統一が感じられる。しかしそれを支えるべき思想の統一はない。結局主人公達は諸々の現象の中に内在する **Reality** を洞察する眼を持た

ず、盲目の状態にとどまっているのである。Gerontion は次のように告白する。

I have lost my sight, smell, hearing, taste and touch :

How should I use them for your closer contact ?

従って Gerontion は彼が求める対象の非存在としての現実世界に直面しているのである。詩人が知覚する現実世界は究極的な Reality が非在なる現象界なのである。

ここでやや脱線することになるが、Eliot が非常に大きな影響を受けた Symbolism について言及することは論点をより明確にすることになると思う。言うまでもなく、Eliot が受け継いだのは Laforgue を含めたフランスの Symbolism の伝統であった。Edmund Wilson は *Axel's Castle* という評論集において、Eliot を含めて、Yeats, Valéry, Proust, Joyce, Gertrude Stein の6人の作家を何らかの意味でフランス象徴主義文学の血脈に連なる人々であるとし、そして彼等に共通の文学精神を「想像力による非現実世界の創造」という特色の中に見ようとしている。⁽³⁾ ここで問題となるのは、Symbolism とはかなり form や technique の問題ではあるけれども、それは本質的に物質的現象の背後に神秘的な Reality を探究しようとするものであるということである。*The Symbolist Movement* の序論において Symons は次のように語っている。

..... the literature of which I write in this volume [is] a literature in which the visible world is no longer a reality, and the unseen world no longer a dream.

従って Eliot がこの世を非存在としてまた超絶的存在を実在として見ようとする根拠の一つをここに見出さざるを得ないのである。

Middleton Murry の言葉を借用すれば、“indefinable spiritual qualities”を

定義するためには、われわれは何らかの **transcendentalism** を避けることは出来ないのである。⁽⁴⁾ 勿論これ以外に **Eliot** に強い影響力を与えた諸々の思想を見逃すことは出来ない。Plato, Aristotele, Augustine, Dante, Hegel, Kante, Emerson, Bradley, Bergson, 東洋の神秘思想, 人類学, キリスト教と枚挙にいとまがない程である。ここでそれら各々について論究することは出来ない。ただ周知の如く **Bradley** の **Eliot** に対する影響は生涯の彼の方法的礎石となった程強いものであったことは注目に値する。**Bradley** によれば **sentience** なしには **reality** は存在し得ないが、それだけでは **reality** を構成するに充分ではないのである。**reality** は知覚を包含し、一方知覚を変容するのである。それは知覚するものを包含し同時に超越するのである。また **Eliot** の意識は **Bergson** の **intuition** に一致するものである。**Bergson** によれば **reality** は **intuition** によって知られるものであるが、普通の知覚は混乱し、断片的で無意味なものにすぎないのである。

さてここで再び詩人の意識と想像力の問題に話を戻してみると、われわれは **Sartre** がそれについて語っている言葉に注目したい。**Sartre** によれば知覚が眼前の事物に結びついて現実世界を志向するのに、イマージュ（像）とは眼前の現実を離れて、非現実の世界、架空の存在を志向する性質をもっている。従ってイマージュ喚起の機能としての想像力は知覚作用と共に意識の世界を大きく二分する極めて重要な心的要素となる。そして **Sartre** によれば、想像上の対象の措定は、その対象の実存性を否定する契機が必ず必要であり、かくて現実否定の作用こそ不可欠なイマージュの構成因となる。更に彼は、想像力が現実世界を否定しつつも、実はその世界によって背後から支えられているように、意識の自由とは常に現実から距りを置いた関係を保ちつつも、その世界によって支えられていると説く。⁽⁵⁾ **Eliot** は次第にキリスト教に傾斜して行くが、**Sartre** は神を信じない。しかし同時代に生きたフランスの作家のこのような考察は **Eliot** の **reality** への **approach** に何らかの視点を投げかけてくれると思う。

それではこのような視点のもとに再び Eliot の作品に目を投げてみよう。

The Waste Land においてあらわれる 'eye' symbol には初期の詩にみられた Personality の概念は次第に Person の概念へと移り始める。才能ある個人の特異性は今や消失せんとし、それにとって代ろうとするものは人類の一員を構成する責任である。この変化は西洋の歴史において画期的なことなのである。勿論特異な Personality をあらわす 'eye' symbol はいまだ残存しているが、それはただとるに足らないものとして表現されているにすぎない。“A Game of Chess” においてわれわれが見出す 'eye' symbol の大部分はのろわれた人々の眼を意味する。芸術の代りに “golden Cupidon” があり、婦人の居間の “staring forms” がある。われわれが次の一節の中に見出すものは、Christ の新しい到来を待つかのようにドアの knock を待ちながら自分の為していることに意味を見出せぬ人々の眼である。

And we shall play a game of chess,
Pressing lidless eyes and waiting for a knock upon the door,

それは Lil の “straight look” の中にその相対物を見出す。更に同様な 'eye' symbol は “The Fire Sermon” の次の一節の中にも見られる。

At the violet hour, when the eyes and back
Turn upward from the desk, when the human engine waits
Like a taxi throbbing waiting,

すべての情景はこの詩の構成上の climax において出会う typist の眼と家屋周旋人の “bold stare” の中に融合し、そしてそれらの眼がこの詩の主人公たる Tiresias の眼と出合うとき、その本来の姿が明らかになって来るのである。初期の詩において Personality を表現するものであった「眼」の象徴はこの詩

においては **Tiresias** や **Phoenician Sailor** の「眼」の中に吸収され消失してしまうのである。**Tiresias** は **Personality** に属するものではなくて、その責務が **Datta**, **Dayadhvam**, **Damyata** の言葉に要約されるような個人に属する **vision** を持っていて、盲目ではあるが見ることが出来るのである。**The Phoenician Sailor** の眼に関しては、次に見られる如く、**Shakespeare** のそれと同じく、**Gospels** に語られる非常に貴重な真珠である。

Those are pearls that were his eyes.

それらは等しく知覚作用を欠如して居り、それ故にこそ背後にひそむ **Reality** を洞察する新らしい **vision** を獲得しているのである。それは前述した如く、現実世界の否定を契機とした想像力の作用によってである。そしてこの概念と共に全く新らしい意味が **'eye' symbol** に付加されるのである。というのは、キリスト教的 **nuance** において言えることだが、個人は最早単独でおのが責務を果すものではないからである。内在的恩寵が彼を助けるのである。飛躍することになるかも知れないが、**Sartre** が言う如く、非現実的なものを産み出すことにより、意識は一瞬、自己の世界内存在性から解放されているような観を与えることは出来るが、実は反対に、この世界内存在性こそ想像力の必要条件なのである。従って詩人が求める究極的 **Reality** は現実世界において非存在として否定されながら、しかも内在的なものとして追求されねばならない。**The Hollow Men** においては **'eye' symbol** はこの内在的恩寵を示すものとしてあらわれる。このことは **Beatrice** や **Virgin** の眼への言及によって明らかになる。

Those who have crossed

With direct eyes, to death's other Kingdom

「死のべつな王国」へ渡っていった者たちは、すでに、人間的愛、聖さん、教会、神の恩寵、聖母などの合着たる **Beatrice** の叱責の眼に出合った者たちなのである。*Purgatorio* 第30歌及び第31歌において **Dante** に悔恨の涙を流させたのはこの眼である。一度人が悪の真の性質を見たならば、そのうけなければならぬ浄罪の過程においては、この救剤の眼は恐ろしくうつるのである。しかしこの詩の主人公であるうつろな男たちにとっては、この恩寵を示す眼は非在なるものとしてとどまる。

Eyes I dare not meet in dreams
 In death's dream kingdom
 These do not appear:
 There, the eyes are
 Sunlight on a broken column……

一個人としての本質的要素にまで剝奪され、恐怖にとりつかれた魂は神の助けをもたらず眼の必要を感じながら、彼の前にそれが非在なることにおびえるのである。

The eyes are not here
 These are no eyes here
 In this valley of dying stars……

そして彼は自分が次のような状態にとどまることを知っている。

Sightless, unless
 The eyes reappear
 As the perpetual star

Multifoliate rose
 Of death's twilight kingdom
 The hope only
 Of empty men.

“Multifoliate rose” は愛としての無時間的実在の象徴である。前後することになるが、この愛としての無時間的実在への言及は *The Waste Land* の “hyacinth girl” の場面においても見られた。

—Yet when we came back, late, from the hyacinth garden,
 Your arms full, and your hair wet, I could not
 Speak, and my eyes failed, I was neither
 Living nor dead, and I knew nothing,
 Looking into the heart of light, the silence.

ここにみられる “heart of light” は再び *Four Quartets* の中においても言及される。しかしそこでも詩人は “human kind/Cannot bear very much reality” としてその光の中にただちに入り込むことを拒絶している。というよりもこういった無時間的実在というものはほんの脱自的瞬間しか訪れないものであると深い諦観をもって嘆いているかの如くである。

さて再び ‘eye’ symbol に帰ることになるが、Eliot の短い詩 “Eyes that last I saw in tears” においてあらわれるのもこの恩寵の眼である。その詩を理解するためには、眼そのものが涙の中にあるのではないということを知らなければならない。それは Dante のように泣く人を見る眼である。更にこの神秘的な詩にあらわれる “door” は Purgatory への入口ではなく、Purgatory から Earthly Paradise への入口である。またこの繰り返してあらわれる治癒の眼は *The Family Reunion* では Eumenides の眼という別の形であらわれることは

言及する必要がないであろう。

以上に述べて来た 'eye' symbol にまつわるすべての意味はそれに続く詩においても持続している。 *Ash-Wednesday* における主人公の恩寵への服従は彼に新しい、変形した眼を与える。詩人は次第に現世を超えた非物質的、超絶的世界が存在することへの確信を深めて行く。しかし Eliot のとる Symbolism は最早 Dante のような明確な思想によって支えられた Symbolism とは異った形をとる。そこには大きな時代の隔差が感じられる。Eliot はただ一輪の薔薇の花を「庭」そのものと変容させ、そこにすべての愛の終局を見ようとする。そして分解させられた個人の知覚を甦えらせるのはこの恩寵としての愛であると言う。

It is this which recovers

My guts the strings of my eyes……

この恩寵としての眼の vision のあとで詩人は次のように言及する。

The new years walk, restoring

Through a bright cloud of tears.

そして過去の illusion へと誘うのは再び前述の消滅した Personality の “blind eye” である。

And the blind eye creates

The empty forms between the ivory gates.

このように恩寵によって鼓舞された個人としての vision は各々の意味内容において違った色彩を帯びている。しかし個人としての責務に覚醒した眼への言

及は *Little Gidding* にまで続いている。そこに表現される “the quick eyes of Woolly Bear” にはやすらぎも休止もない。(大熊座は決して固定しない。) というのは人は新らしい生に “With direct eyes” をもって渡らなければならないからだ。探究はいまだ達成されない。

Our gaze is submarine, our eyes look upward
 And see the light that fractures through unquiet water.
 We see the light but see not whence it comes.

しかし *Little Gidding* は次の詩行において climax を示している。

And as I fixed upon the down-turnd face
 That pointed scrutiny with which we challenge
 The first-met stranger in the waning dusk
 I caught the sudden look of some dead master
 Whom I had known, forgotten, half recalled
 Both one and many; in the brown baked features
 The eyes of a familiar compound ghost.

この亡霊は Eliot をここまでもたらしたすべての影響力の要約であり、同時に更にこれから先の発展の先ぶれなのだが、それは彼が聖霊と接合するときのその発展を明らかにしている。

以上に述べた Eliot の ‘eye’ symbol と密接な関連を持つものは彼の詩や劇にあらわれる “one-eyed” の人物である。その最初のものは *Rhapsody* にあらわれる地獄の女王たる月である。

She winks a feeble eye,

She smiles into corners.

それは初期の詩集の本質的孤独を要約するものである。第二詩集の “Sweeney Erect” においては一つ目の巨人 Polypheme は残酷にも可憐な少女 Nausicaa と組合せられている。 *The Waste Land* では現代の占師 Madame Sosostris のトランプ占いのカードの中にでてくる人物に “one-eyed merchant” がある。

And here is the one-eyed merchant, and this card,
Which is blank, is something he carries on his back,
Which I am forbidden to see.

古代において再生の奥義の伝達者とされていた “one-eyed merchant” は現代の unreal city では友達に提供する安びかの秘法を持った Mr. Eugenides であることがわかる。ついでながら Madame Sosostris は時間を代表するものであって、彼女は過去と未来を見ることは出来るが、無時間的存在への洞察力は与えられていないのであって、“hyacinth girl” と対照をなすのである。第三の “one-eyed” の人物は *The Family Reunion* における “The eye” である。この眼は絶えず人間にその運命を遂行させることを促す仮借なき神の恩寵の眼である。それは Harry をその medium として選ぶ。しかしその真の対象は家族全体である。

The eye is on this house
The eye covers it.

最後の人物は勿論 *The Cocktail Party* の永遠的な Agape のための music を提供する One-Eyed Reilly と彼の娘である。これらの “one-eyed” の人物への言及は明らかに Eliot の究極的実在そのものに関する思考の一貫した発展を示す

ものである。

勿論このような 'eye' symbol の内包する意味を探求するだけでは Eliot の reality への approach の過程を説明するに不十分である。それは彼の執拗なまでの pattern の意味の追求に象徴的に示されている。彼は *Four Quartets* において、それまでいずれも非存在とみなして来た物質的世界と精神的世界の二つの存在領域を調和しようと努力している。

We move above the moving tree
In light upon the figured leaf
And hear upon the sodden floor
Below, the boarhound and the boar
Pursue their pattern as before
But reconciled among the stars.

しかしその pattern とはわれわれの新らしい経験によって絶えず修正されなければならないのである。

.....the pattern is new in every moment
And every moment is a new and shocking
Valuation of all we have seen

同じことが少し意味内容を変えて次のように表現されている。

See, now they vanish,
The faces and places, with the self which, as it could, loved them,
To become renewed, transfigured, in another pattern

詩人が瞥見する **pattern** とは運命とか宿命とか呼べるものであるかも知れない。大事なことはそこにはある超越的な秩序の意義深き配列があるということであり、この **pattern** は時間を超えたように思える瞬間においてのみ **reality** として経験されるということである。そしてこの無時間的実在は後期の詩においては一層キリスト教の **revelation** (啓示) と関連づけられるのである。恩寵はキリストの **Incarnation** において啓示される。H. R. Williamson が言う如く、**Catholic** 信者は **Incarnation** の教義を強調し、一方 **Protestant** は **Atonement** に強調を置く。⁽⁶⁾ Eliot は **Anti-Episcopal** な家庭に育ち、のちに **Anglo-Catholic** に改宗する。この問題について詳述することはここでは避けるが、ただ Eliot はどちらにも無関係ではないということは確かなのである。

ところで Eliot の突然の啓示の瞬間の経験に関する描写には若干の意義内容の相違がみられる。Kristian Smidt はそれを次の四つに分類している。⁽⁷⁾

- (i) Poetic fulfilment.
- (ii) Pure observation,
- (iii) The rapture of love.
- (iv) Transfiguration.

しかしこれと対照的にEliotがいつもとるもう一つの方法は、**St. John of the Cross** や東洋の神秘思想を暗示させる **darkness** への沈潜である。彼は非存在としての現実世界の闇を内心の闇 (**internal darkness**) と変容することによって神の闇と融合しようとするのだ。全体として Eliot はこの世における生の状態を **Purgatory** として、**hospital** の **image** の中にみようとする。それは“**death's dream kingdom**”において、Eliot みずから自己に課する修練である。彼の **approach** は一面極めて実存主義的なのである。彼は現実世界を否定しながら、その裏面では現実世界によって支えられているのである。彼の **Symbolism** は **Hell, Purgatory, Heaven** として視覚化される異なった存在領域の概念に支えられている **Dante** の **Symbolism** とは違ったものなのである。

以上われわれは Eliot の詩における ‘**eye**’ **symbol** を中心として、彼の視点

と reality への approach の方法を考察して来た。思うに、われわれの意識には色々な level があろう。まず第一に記憶が単に過去のものとしてしか存在せず、未来が視野からさえぎられるような単に年代記的流動を知覚する日常的な覚醒した意識である。第二には、制限のある意識が眠っているとき夢の中に作用して、表象のより広大な領域、言換えれば過去の出来事も未来の出来事も同様に知覚されるような四次元的な視野を獲得する意識である。更に理論的にはそれより広い領域をみるところの意識、遂には究極的 Reality を認識することが出来る意識と無数に考えていくことが出来るであろう。このように考えてみると、Eliot の視点と実在への approach の過程には、20世紀精神史の perspective に関する並々ならぬ興味ある暗示を認め得るように思うのである。

〔註〕

- (1) Genesis Jones, *Approach to the Purpose: A Study of the Poetry of T. S. Eliot* (Hodder and Stoughton, 1964), p. 212.
- (2) Cf. Jean-Paul Sartre, *L'imaginaire* and *L'imagination*.
邦訳では平井啓之訳「想像力の問題」(人文書院, 昭和30年1月)がある。
- (3) Cf. Edmund Wilson, *Axel's Castle: A study in the Imaginative Literature of 1870 to 1930* (Charles Scribner's Sons, 1931).
- (4) J. Middleton Murry, *Countries of the Mind*, Second Series (1931), pp. 9, 15.
- (5) Cf. Sartre, *op. cit.*
- (6) H. R. Williamson, *The Poetry of T. S. Eliot*, p.161.
- (7) Kristian Smidt, *Poetry and Belief in the Work of T. S. Eliot* (Routledge and Kegan Paul, 1961), pp. 173—4.